

眼科ケーススタディ 網膜硝子体

吉村長久、喜多美穂里 編

京都大学の眼科は網膜硝子体疾患のメッカである。伝統の中で育まれた優秀な研究者たちによって膨大な網膜硝子体の基礎研究と臨床研究がなされてきた。また、日本で最初に硝子体手術を行った盛新之助先生をはじめ、非常に優れた多数の網膜硝子体サージャン、優れた網膜硝子体スペシャリストを輩出されてきた。

その中のおふたり、吉村長久先生と喜多美穂里先生が編集され、京都大学眼科学教室に在籍中あるいは、かつて研鑽を積まれた先生方が執筆された『眼科ケーススタディ 網膜硝子体』が上梓された。31の症例提示とそれについての解説がきれいなカラー写真、光干渉断層計、蛍光眼底造影写真を用いて解説してある。必要に応じてシェーマも多用され、よく整理されていて理解しやすい。

31の疾患は黄斑上膜、黄斑円孔、加齢黄斑変性、網膜剥離などの比較的頻度の高いものから、家族性滲出性硝子体網膜症、動脈炎性前部虚血性視神経症、癌関連網膜症まで多岐にわたる。優れたものは「ポイント」の項で、可能性のある鑑別疾患について、そのポイントが写真付きでわかりやすく解説されている。ケーススタディの場合、読者は受動的に読むのではなく、症

例についていろいろ考えながら読むことになるので、実践向けの知識が身に付きやすいと思う。その分書き手には臨床経験と疾患に対する整理された知識が要求される。個々の網膜硝子体疾患のたくさんの患者さんを診て、治療し、それらの診断、治療について整理してこられた京都大学眼科学教室だからこそ、深みのあるケーススタディができあがったのだと思う。

難は症例提示が31疾患であることである。網膜硝子体疾患は多岐に及び数も多い。ぜひ他疾患について続編を出してもらいたいと思う。その際には、典型症例のみならず、同一疾患のバリエーションについても解説してもらいたいと思う。

いずれにせよ本書は網膜硝子体疾患の理解と整理に有用で、明日から自分の臨床に役に立つ「良書」である。また、専門医試験の臨床実地試験の対策としても有用であると思う。

駿河台日本大学病院教授・眼科学 湯澤美都子

B5 頁 272 2010 年

定価 13,650 円 (本体 13,000 円 + 税 5%)

[ISBN978-4-260-01074-0] 医学書院刊